

令和4年度 国立若狭湾青少年自然の家 教育事業

「ぼくらは勇者だ！わかさわんキッズ冒険隊」(R4.7.23(土)～7.24(日))

◆目的

- ・ 若狭湾の自然で思い切り遊んだり、生活したりすることを通して、自身と海とのコミュニケーション能力を醸成する。
- ・ 自然の中での様々なチャレンジを通して、自信を付ける。

◆参加実績

小学1年生～3年生(23名)

1年生 6名(男4 女2)

2年生 8名(男4 女4)

3年生 9名(男4 女5)



アイスブレイク

上：班で自己紹介

下：進化じゃんけん

【日程】

7月23日(土)1日目

10:30	11:00	11:20	12:10	13:45	16:15	17:00	18:10	19:00	20:30
受付	開会式	なかもつくり (アイスブレイク)	お昼ごはん (レストラン)	うみとともだち (うみあそび)	お部屋の準備 休憩	夜ごはん (レストラン)	お風呂	うみのいきもの おはなし	就寝 (しゅうしん)

7月24日(日)2日目

6:00	6:30	7:00	9:15	10:00	12:00	12:50	13:45	14:15
起床	そうじ	朝ごはんづくり (カートドッグ)	準備 着替え	うみをたんけん (スノーケリング)	着替え 片付け	お昼ごはん (レストラン)	ふりかえり	閉会式

◆成果

- ・ 海で遊ぶことの楽しさを知り、全身で海を感じる充実した活動ができた。
- ・ 名古屋 ECO 動物海洋専門学校の白井先生と学生ボランティアと連携し、海の生き物の特徴や生態について楽しく学ぶことができた。
- ・ 身の周りのことは自分でしたり、少し難しいことは友達と協力してチャレンジしたりする姿を見ることができた。



↑うみあそび

飛び込み台から勇気を出して飛び込む様子
飛び込み台の上と下でボランティアがサポートした。



↑うみあそび

水中、浅瀬、砂浜と大人の配置を分け、安全管理に努めた。

◆参加者の声

【海活動】

- ・ 飛び込みができるようになった。
- ・ 魚ともだちになることができた。
- ・ みんなで手分けして生き物を見つけられた。
- ・ 水が怖いけど海に入れた。
- ・ ウニが触れるようになった。

【生活】

- ・ ふとんやシーツをみんなで協力して持っていくた。
- ・ カートドッグ作りを協力した。みんなで火をつけたり、パンに具材をいれたりしたから。

◆保護者の声（保護者アンケート）

- ・ 帰ってきてからはお手伝いを進んでやってくれたり、自分の事は自分でやったりとたくましくなったように思います。褒めると僕は勇者だからって言っています。
- ・ 近くの海に行っても顔をつけて魚など探して楽しんでいます。
- ・ また機会があれば参加して次こそは泳いで魚を見つけないか！とっていました。
- ・ お世話になったボランティアの方に、手紙を書きたい！また会いたい！海に潜りたい！と、とても楽しい時間を過ごす事が出来たようで、このような体験をまた是非機会があれば参加させて頂きたいです。



↑スノーケリング活動の様子

◆事業運営のツボ・工夫・反省

- ・ 楽しく海とコミュニケーションを図れるよう、うみあそびからスノーケリングとステップを踏み、少しずつ海に慣れるプログラム構成とした。そのため、海に対して恐怖心を抱いたりする子どももおらず、全員が海に入って活動することができた。
- ・ 「うみのいきもののおはなし」では、講師の白井氏が生き物の特徴や生態について楽しく解説をしてくれた。タライに用意した生き物を実際に触れ、間近で見ることによって詳しく観察することができた。昨年度はナイトハイキングを実施したが、午前中の海活動もあり、子どもたちが疲れて集中力がなかったという反省があったため、今年度は室内のみでの活動として、ゆったりと生き物観察に励んだ。今年度も、企画段階ではナイトハイキングを予定していたが、当日の子どもたちの様子を見て、「いきもののおはなし」だけにした。
- ・ 今回の小学校低学年のスノーケリングは、子ども2人に対して大人1人が必ず付くように配置をした。そのおかげで、子どもたちに手厚くサポートができ、子どもにとっても、大人にとっても安心・安全な海活動を提供できた。特に小学校低学年のスノーケリングは、サポートする大人の人数を配慮する必要がある。
- ・ 参加者に自信をつけてもらうため、チャレンジカードを作成し、段階的にチャレンジできるような工夫をした。また、チャレンジを達成したら班担当のボランティアからシールを貰えるようにし、活動を振り返る機会を創出した。その結果、最後の振り返りでは自分の言葉や絵で、2日間の感想や思い出を表現することができた。
- ・ 昨年度は海活動に時間を割きすぎてしまい、ふりかえりや活動道具の片付けなどが十分にできなかった。その反省を活かし、今回は時間に余裕をもったプログラム構成とした。また、集合時間や活動時間を活動前に参加者と一緒に確認して、時間を意識するように工夫をした。
- ・ 熱中症対策のため大浜にジャグを設置し、いつでも水分補給できるような環境を整えた。また、海活動時は20～30分経ったら休憩するように声掛けをしたことで、熱中症等の体調不良者はでなかった。
- ・ ボランティアには、前日に事業の意図や役割、コロナ対応のことなどを共有した上で事業に臨んだ。特にコロナ対応に関しては、実施前に感染者数が増加し始めたこともあり、場面や行動によってどのような対応をするかの共有をした。具体的には、職員・ボランティアは屋外での活動中、原則マウスガード着用（海活動も含む）。就寝中はエアコンを使いつつも、空気の流れを作るためドアや窓を開け喚起をする。県のHPや文部科学省、厚生労働省の方針を参考に対応策を考えた。
- ・ 応募が180名近くあり、ニーズが高いことから、募集枠の増員や複数開催などを検討していく必要がある。



↑いきもののおはなし

白井氏が子どもたちに生き物の説明をしている様子



↑チャレンジカード

頑張りが見えるような仕掛け。

お家に持って帰ってお話するきっかけにもなる。



↑ふりかえりで作ったカードと水槽

スノーケリングで採った生き物を水槽に入れ、その特徴や様子を絵や文字で表現してもらった。「うみのいきもののおはなし」のおかげで、特徴を細かく書いていた。閉会式後、子どもたちは保護者の方に水槽を見せ、生き物やキャンプのことを話していた。